



KAGAWA HISTORICAL ARCHITECTURE COMMITTEE

vol.03



近代住宅 遺産としての 「石井家住宅」

戸塚元雄

※本文は2016年、本会設立に先立って開かれた
第一回香川文化遺産保全技術者養成講座の受講生
に向けて書いたものです。

9月講座は小豆島に残された登録有形文化財の見学でした。

当日、私は大工の松尾さんと共に馬木地区・石井家住宅の解説をすることになっていたのですが、石井さんのお話と初めて見る建物に気を取られて役割を果たすことが出来ませんでした。そこで遅まきながら改めて石井家住宅について私なりの解説を試みたいと思います。解説と言っても限られた時間の印象に過ぎないので間違いがあるかも知れません。そのつもりで読んでください。

石井家住宅は主屋、長屋門、離れ屋、醤油蔵、土蔵、納屋の六つの建物で構成されていて、これら全てと別の場所に建てられた浜長屋を含めた七棟が登録有形文化財になっています。今回は浜長屋を除く六棟を見せてい

ただきました。建築年代は古い順に醤油蔵が明治18年頃、主屋が大正元年、長屋門と土蔵が大正4年、離れ屋が昭和初期、納屋が昭和16年とのこと。この年代を見ると醤油蔵が建てられた頃の住宅は別の建物であったようです。

石井さんのお話では、小豆島の醤油業の前身は江戸期に赤穂から移住した製塩業者で、当時は現在の街の中心部は海であったとのこと。そのため建物は山側の斜面に建てざるを得なかったのでしょう。石井家の住宅群は段差のある敷地に棟を接するように建てられていました。

長屋門が通常とは異なり主屋に直交しているのも敷地に余裕がなかったからと思われる。主屋・長屋門・離れ屋の材料・意匠には明治から昭和にかけての小豆島醤油業の隆盛を窺

わせるものがありました。

主屋は東西軸の棟を持つ瓦葺き入母屋造りの平屋建で東側を土間、西側を畳敷としていました。これは近世以降の民家に一般的な構成です。

土間上部は吹き抜けでなく踏み板の大和天井(用途は物置?)になっていて、奥の方に簡単な階段があり、階段の手前は格子戸で軽く仕切られていました。階段の上り口付近の柱は8寸角の立派な檜の大黒柱でしたから、当初この土間は奥まで続いていて格子戸や天井、階段などは後からつくられたのかも知れません。

主屋の前庭は塀で東西に仕切られ、西側が座敷に面した主庭になっています。訪問客は塀の中程に設けられた中門を潜り、主庭に面した来客用玄関から出入りします。



石井家住宅主屋玄関

来客用玄関は屋根の形を変えるなど存在を強調する例が多いのですが、ここでは主屋の庇部分に目立たずに納めています。そのため奥行きは半間ほどしかありませんが、その狭いスペースを巧みに使って式台と二段の上がり框が設けられ、正式な玄関としての格式を保っていました。

主室は室町以来の書院造の伝統にほぼ忠実につくられていて、過度な装飾や作為がなく好感が持てました。木柄は良くわかりませんが、たぶん榎か檜だろうと思います。畳は6尺3寸×3尺1寸5分の京間畳、内法高は5尺7寸、柱は4寸角、長押の成は3寸5分でした。伊藤ていじ著「民家は生きていた」によれば、瀬戸内の民家は近畿の民家と密接な繋がりを持つとのこと、それはこうした寸法

に表れています。

当然、大工の行き来もあったと思われませんが、全体のつくりから石井家住宅は瀬戸内圏の大工の手によるものと推測できます。

主屋の南側に庭を挟んで建てられた離れ屋は昭和初期、おそらく醤油業が全盛だった頃にご当主の趣味の部屋かゲストハウスとしてつくられたものでしょう。

天井は屋久杉の棹縁天井、床の間や床脇には花梨や柃など珍しい木が使われていました。一見すると数寄屋造りのようですが、天井は結構高く、柱は主屋座敷と同じく4寸角で長押も廻しているのが数寄屋造りと呼ぶのは躊躇われます。

畳寸法や内法高も主屋と変わりませんが、こうした建物ではよく京都などが

ら職人を招いたという話を聞きますが、全体の雰囲気から考えて、これも主屋同様、瀬戸内圏の大工の仕事のような気がします。

日本の近代、つまり明治から昭和に至る日本家屋の変化は、江戸期に完成した武家様式が民家へ浸透・拡散する過程と見る事ができます。それは、一言でいえば接客機能の重視であり、具体的には門、庭、玄関、座敷として現れています。一方に西洋の生活習慣を取り入れようとする新しい動きがあり、それが近代の住宅を代表するようになっていますが、こうした住宅が全体に占める割合はまだ少なく、多くの住宅は前者の道を選びました。石井家住宅もその一つに数えることができるでしょう。

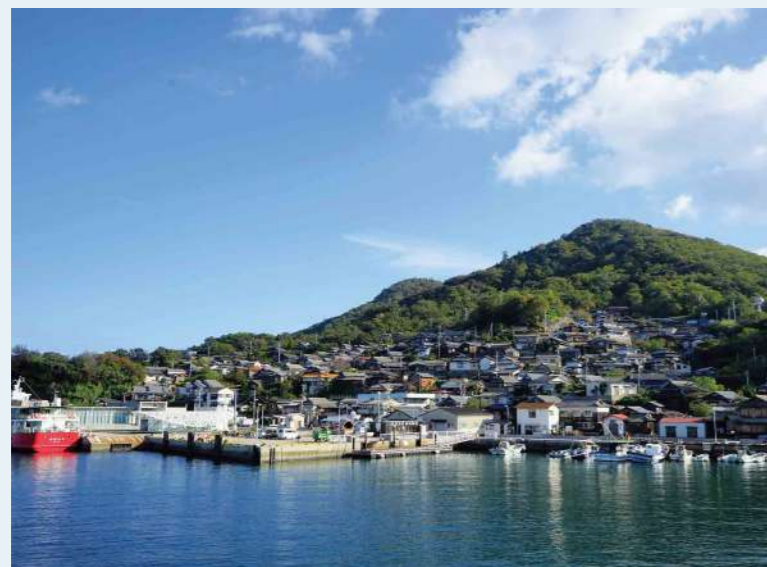
●コラム
古民家を
思う

第3回

山の斜面に建つ口の字型の民家

高橋 史

古民家を懐かしいと思う。
住んだこともないのになぜか懐かしい。
懐かしさのより所(根拠)はどこに
あるのだろうか。



【男木島 山の斜面に密集する民家】



【カフェと宿の入り口】

※1 勾配は約3.8°と推測
参考:日本建築学会技術報告集 第22巻第50号 2016年2月 「男木島の路地および宅地擁壁の特徴から見た街路景観に関する研究」藤井容子
https://www.jstage.jst.go.jp/article/aijt/22/50/22_249/_pdf

男木島は、香川県高松市の沖合約7.5kmに位置する面積1.37km²の小さな島です。

平地が少ない島では、山の斜面に折り重なるように民家が密集しています。「ogijimaゆるる」(以下、ゆるる)はその集落の中腹、ゆるやかな勾配※1の路地に面して建っています。大正12年築の民家を改修、耐震補強をして2019年にオープンしたゲストハウス&カフェです。

中庭を囲むように並ぶ棟

細い路地に面する「ゆるる」の敷地は周囲を石垣で囲われ、その上に建物の外壁が直接建つ、さながら日本の城のような造りです。

壁の間に設けられた入り口を入ると、閉ざされた外観とは打って変わり、開けた中庭がありました。



【敷地を囲う石垣】



【壁の間に設けられた入り口】



【宿泊者用台所の2階から中庭を望む】



【開けた中庭】

興味深いのは、中庭を取り囲むように居間や台所、風呂、トイレなど、用途ごとに棟が分かれていること(図1)。

口の字型に棟が並ぶ造りは、海風が強い斜面地での工夫だと店主が教えてくれました。

男木島の民家の多くは、「ゆるる」のように石垣を積んで平らな敷地を形成しています。

しかし、路地と敷地との関係性一たとえば路地より敷地が低いか高いか一などにより、建物の形状にもいくつか違いが見られました(図2~5)。

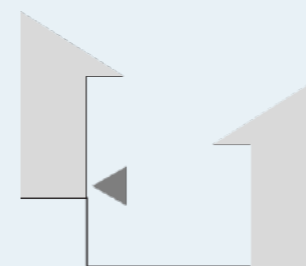


図2 ゆるるはこのタイプ

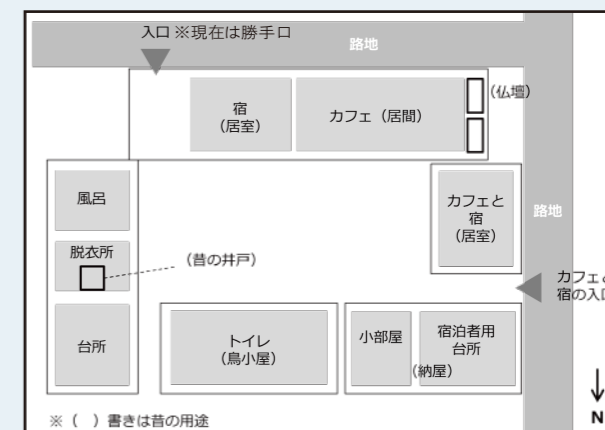


図1

路地と敷地との関係性

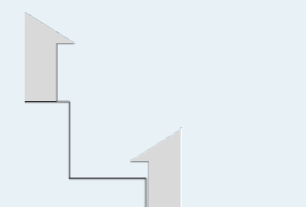


図3 路地の左側の敷地が下がっている



図4 路地と敷地が同じレベル

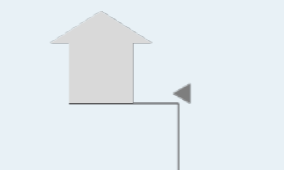


図5 路地からかなり敷地が上がる



●コラム
古民家を
思う
第3回
山の斜面に建つコの字型の民家



【高見島 中塚邸】



【中塚邸の母屋】

以前に訪れた香川県高見島も斜面地に集落がありますが、そのうちの一軒、中塚邸は主屋と石垣が分離していました。主屋の造りは平地に建つ農家住宅と変わらないように感じます。

徳島県三好市東祖谷落合集落の民家も斜面地に建てられていますが、主屋と納屋が横並びに配置されることが多く、「ゆくる」のようなコの字型は見られないようです(図6)。※2

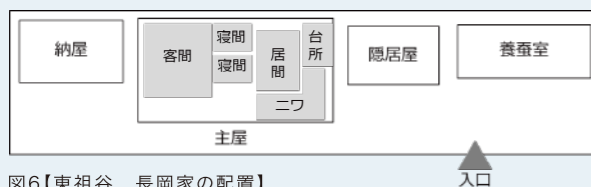


図6【東祖谷 長岡家の配置】

路地や敷地の広さ、気候条件と照らし合わせながら、もっと探ってみると面白いかもしれません。男木島の限られた土地、様々な形状の敷地にあわせて、それぞれの民家が配置に工夫を凝らしていることが伺えました。

暮らしの知恵が 詰め込まれた家

田んぼが無い男木島の人々は漁業を主な生業としてきました。



【船の櫂(かい)】

【軒に保管されている船の櫂(る)】

「ゆくる」には昔の船の道具が展示・保管されており、男木島の漁業の暮らしが垣間見られます。また、男木島では各家で牛を飼い、農作業に使う借耕牛(かりこうし)として高松に貸し出していた歴史もあります(「ゆくる」では牛は飼っていませんでした)。

現在は水道が整備されていますが、昔は各家の井戸から水を汲んでいました。「ゆくる」にも井戸が残っていて、今も水が出ると言います。暮らしに必要なものは、すべてここに備わっている。

晴れた日には中庭で作業をしたり、雨の日には蚕の糸を紡いだり…男木島の資源を大切に、無駄なく活かしてきた暮らしが目に見えそうです。

建設年代:大正12年(1923)
建築面積:130.27㎡
所在地:香川県高松市男木町194-1
構造:木造平屋、一部2階建て
カフェの営業:土・日・祝11:00~16:00
(ランチは予約優先)

※2 参考:平成24年度 近畿大学工学部建築学科卒業研究概要「徳島県三好市東祖谷落合集落の空間構成の調査」二宮健一
<https://archi.hiro.kindai.ac.jp/laboratory/APL/student/2012/ninomiya.pdf>

活動 報告



三番叟の奉納/2022年5月3日(写真:土庄町教育委員会)

「肥土山(ひとやま)の舞台」修理工事が完了

大西泰弘

本会が調査設計にかかわった「肥土山の舞台」修理工事が2022年2月に完了しました。

今回の工事では瓦葺と茅葺屋根の全てを葺替えました。瓦葺屋根は凍害や長期の湿潤状態で多くの瓦の劣化が進行していたため、調査で確認できた舞台改築時である明治期の意匠を再現した瓦を製作することになりました。茅葺屋根では垂木の折損が確認され、他の垂木の折損も考えられるため全材を交換。

垂木には地元である大鐸(おおぬで)財産区のヒノキ丸太を使用しています。文化財建造物の修理ですが歌舞伎奉納や建物維持管理に支障がないよう、古くからの技術や材を用いながら新しい材料や現代の技術を使った修理としました。

小豆島は古くから島の人々のために芝居を演じる地芝居が盛んな地域でした。島内では現在もこの「肥土山の舞台」と小豆島町の中山春日神社にある「中山の舞台」で年に一度、

歌舞伎が奉納されています。2022年5月3日、工事完了のこけら落としと五穀豊穡を願って肥土山農村歌舞伎保存会により「三番叟」が奉納されました。



全景



離宮八幡神社境内位置図

文化財名:重要有形民俗文化財 肥土山の舞台
指定年月日:昭和50年(1975)9月3日
指定範囲:舞台、高座(見物席)2棟、衣装蔵1棟、棧敷
所在地:香川県小豆郡土庄町肥土山字東甲2303番地
建物概要:木造平屋の寄棟造り、茅葺、四角下屋は本瓦葺及び檜瓦葺で東面に化粧部屋が付属する。平面は、梁間8.82m、桁行13.62m、桁行のうち舞台下手となる東側に東西3.48m、南北7.75mの化粧部屋が接続する。舞台は社殿に向かって北面して建つ東西棟で、皿回し式廻り舞台、ぶどう棚、太夫座、せり、花道、二重台など舞台機構を具備する。また、石積み階段状の平座と高座とよばれる2棟の足棧敷を備えた客席構えは他に類例をみない。

保存修理の現場から

香川県内で現在行われている歴史的建造物
保存修復(修理)工事の現場からのリレー・レポート。



■ 第3回

善通寺誕生院太鼓塀の美装化事業 ③

松原 潔



完成(南東から)

修理工事の概要 ~左官工事から屋根工事~

3.左官工事

壁落とし

土壁落としは木部取替や修理が必要な範囲を丁寧に行った。全解体部分は修理技法・修理回数などの確認を行い解体時の古土をふるいにかけて保存した。

工法

箱塀・土塀とも全体に壁の浮きや剥落が見られるため、中塗りまで壁を落とし塗替えを行った。木部取替部分については、必要に応じて下地まで、



シュロ縄張り

撤去し修理を行った(補助対象外工事:第2回参照)。五線の定規筋は凸形式で剥落しやすいため、ステンレスビスと針金の芯棒を取り付け、欠落しないよう定規を使い復元を行った。なお、定規筋の位置および大きさは修理前の状態に準じた。中塗りには砂漆喰を用い、足し塗る部分にはグラスファイバーネットやシュロ縄を下地にして上塗り下地壁を作った。上塗り漆喰は黄土を配合して色見本を作成して当初の壁色も想定したが、修理前の壁色を復元することとした。太鼓塀は雨水や湿気から傷みやすいため、全体に撥水剤を塗布した。

4.屋根工事

破損部分のみ取替えを行う部分修理とした。瓦を丁寧におろし打音検査を行い、再用できる瓦は元に戻し、取替瓦は淡路瓦を使用した。またズレが生じた部分はズレ直し補修を行った。

令和2年(2020)2月17日に一般公開と報告会を開催し、修理工事は同年2月29日に完了した。

保存修理工事を終えて

この保存修理工事によって善通寺誕生院の景観は復元され、建設当初の威容を取り戻した。

また、修理の過程で建設年代の比定につながる新しい知見が得られたことは大きな収穫であったが、一方で文化財登録時の調査の不備も露見した(第2回参照)。当時は時間の制約などもあり、実査や史料調査の精度にやや問題があった。登録申請の書類作成に関わった一員として、誤った情報により今回の修理工事に遅延が生じたことに責任を感じている。善通寺には国重要文化財2件、国登録文化財25件の歴史的建造物が伝存するが、今後はこれらについても逐次実査の機会を設けて登録時の調査データの確認・更新を行い、来るべき修理時の一助となる資料の作成に努めたい。

香川歴史的建造物保存活用会議(KHAC)にはその協力をお願いしたいと考えている。〔完〕

文化財名:国登録有形文化財(建造物)善通寺誕生院 太鼓塀、木造平屋
切妻本瓦葺、土塀箱塀、総長さ60.95m 高さ2.74m・2.31m
建設年代:箱塀:昭和11年(1936)
土 塀 :明治中期頃
事業者 :宗教法人善通寺
施工者 :藤木工務店
設計監理:(有)夢和(ゆめ)詩生(しせい) 伝統建築研究所
技術指導:岡山理科大学教授 江面(えづら)嗣人



定規筋の下地にステンレスビスと針金の芯棒を取り付け



色見本



上塗り



完成(北東、仁王門前から)

香川歴史的
建造物保存活用会議
通信 vol.03

活動
報告

発行：特定非営利活動法人
香川歴史的建造物保存活用会議
発行日：2022年10月15日
住所：〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27
電話：0877-85-5126 FAX：0877-85-5127
URL：http://kagawa-historical-archi.org
mail：info@ksgawa-historical-archi.org
編集会議メンバー（50音順）
大西泰弘、高橋史、玉井幸絵、西谷美紀、松原潔、
村井花子、森本英樹

近代住宅遺産としての「石井家住宅」—— 1-2

戸塚元雄 とつか もとお

国産杉材による住宅設計者。住宅のスタンダードへの視点から
近世・近代の住宅史、1950年代の小住宅などに関心を持つ。

山の斜面に建つロの字型の民家 —— 3-5

高橋史 たかはし ふみ

大学で地域づくりを専攻し、香川県内の観光まちづくりに10年
ほど携わる。明治～昭和初期の近代建築めぐりが趣味。現在、
ウェブ制作会社で取材・ライティングを担当している。

「肥土山の舞台」修理工事が完了 —— 6

草葺き屋根と雁振瓦 —— 11

大西泰弘 おおにし やすひろ

建築ストックの維持管理と再生活用、景観・都市デザイン、ランド
スケープデザイン、地域計画などにかかわるタウンアーキテクト。

善通寺誕生院太鼓塀の美装化事業③ —— 7-8

松原潔 まつばら きよし

日本の仏像、特に運慶の作品にひかれ美術史を学ぶ。仏像だ
けでなく、その安置空間や建築にも関心がある。平等院鳳凰
堂、浄土寺浄土堂、東欧・北欧の木造教会も好き。

第四期 香川文化遺産保存活用技術者養成講座

2022年3月から12月まで、歴史的建造物の調査や修理などにか
かわる技術者の養成を目的に、今期で4回目となる「香川文化遺産
保存活用技術者養成講座」を開催しています。

講座は、歴史的建造物に関する基礎知識から修理や保存活用など
実務で必要となる調査や設計など技術を学ぶ専門的な内容です
が、設計や施工の専門家だけでなく歴史的建造物に興味のある人
は誰でも受講することができます。全60時間の講座と課題を提出
した人には修了証を発行しています。これと同じ講座は全国の各県
で「ヘリテージマネージャー養成講座」という講座名で開催されて
います。香川県での講座は2016年から始まり、2021年の第三期
までに76名が参加し70名が受講修了しました。

2018年6月、身近にある歴史的建造物を評価し、地域活力向上に
役立つよう活用して残していくことを目的に、受講修了者でつくる
団体「香川歴史的建造物保存活用会議(略称、KHAC)」を立ち上げま
した。会員は県内の歴史的建造物の修理や国登録有形文化財の登
録支援など、多くの実績を上げつつあります。

この養成講座は次年度も開催を予定していますので、興味ある方
は事務局までお問い合わせください。また、技術者以外の一般の方
も対象とした文化財建造物に関する講座も準備中です。

本会の活動やご案内は、ホームページなどで公開していますので
ご確認ください。



特定非営利活動法人 香川歴史的建造物保存活用会議

本会はこれまで任意団体として活動してきましたが、2022年8月、
特定非営利活動法人として新たなスタートを切ることになりました。
活動の内容は変わりませんが、法人として志を新たに、地域にとって
欠かせない団体だといってもらえるよう活動の充実を図ります。

第四期
2022年度 香川文化遺産保存活用技術者養成講座プログラム

月/日	講義テーマ	講師(敬称略)
3/26	開講式・オリエンテーション	池田裕美/KHAC
	H.Mの制度/H.Mの役割を知る	池田裕美/KHAC
	文化財概要/香川県の文化財建造物概要	石田真弥/香川県教育委員会
	H.Mの活動事例/H.M概論～兵庫の事例	沢田 伸/ひょうごヘリテージ機構 H ² O
4/23	伝統的木造民家の構法/江戸以前の伝統的木造民家の特徴を知る	麓 和善/名古屋工業大学 名誉教授
	現地研修/四国民家博物館を回り伝統的木造民家の特徴を見る	麓 和善/名古屋工業大学 名誉教授
6/11	現地研修/本島の歴史的建造物の特徴を知る	石田真弥/香川県教育委員会
	日本家屋の意匠と構法/近世から近代までの木造民家の特徴を知る	石田真弥/香川県教育委員会
	伝統木造建築の大工技術/伝統木造建築に用いられる大工技術を知る	後藤史樹/後藤屋
6/25	現地実測演習/文化財建造物の実測調査を行う	山岸常人/京都大学 名誉教授
7/23	文化財の保存修理/文化財の現地調査や修理設計の方法を知る	鳴海祥博/元和歌山県文化財センター
	課題の中間報告/課題の概要を発表する KHAC	KHAC
8/27	文化財の修理事例/修理や維持管理の方法を知る	KHAC
	登録文化財の概要と活用方法/登録文化財の制度や修理方法、活用事例を知る	後藤 治/工学院大学
	文化財の耐震補強/文化財の耐震補強方法を知る	富永善啓/文化財構設計画
	文化財の防災設備/文化財の防災設備について学ぶ	藤井聡志/能美防災
9/24	課題の中間報告/課題の概要を発表し協議検討する	KHAC
	近代建築概要/近代建築の見方や特徴を学ぶ	松隈 洋/京都工芸繊維大学
10/22	H.Mの活動事例/登録文化財の修理や維持管理の方法を知る	福田頼人/徳島文化財マイスター
	伝統木造建築の屋根技術/伝統木造建築に用いられる屋根技術を知る	渡邊 誠/香川県教育委員会 請川和英/請川窯業
	伝統木造建築の左官技術/伝統木造建築に用いられる左官技術を知る	大西泰弘/田園都市設計 秦 竜一/秦左官
11/26	社寺建築の構法/社寺建築の特徴を知る	清水真一/徳島文理大学
	現地研修(会場:善通寺)/社寺建築を見る	清水真一/徳島文理大学
	課題ブラッシュアップ/課題報告内容の要件確認と検討KHAC	KHAC
12/17	文化財の保存と活用/文化財の保存と活用の事例や文化財保護の問題点を知る	未定/文化庁
	発表会、閉校式/課題の調査結果を発表、講座総括、今後の活動参加の方法など	KHAC

※ ヘリテージマネージャーは「H.M」、香川歴史的建造物保存活用会議は「KHAC」と記す

草葺き屋根と雁振瓦

大西泰弘

香川県内にあった草葺き民家の記録写真を見ると、ほとんどの棟には雁振瓦(がんぶりがわら)を据えている。

※
雁振瓦を用いる棟納めは、四国内では徳島県の吉野川沿いでも確認できるが、四国内のほかの地域では、棟は竹や杉皮などで被い下地に縫い付けて固定する方法で納めているようである。(参考:四国の民家・建築家の青春賦／上野時生・編集)

「茅葺きの民俗学(安藤邦廣著)」には、棟に瓦を用いる地域は、関東太平洋沿岸、近畿四国の瀬戸内沿岸、佐賀平野に分布するとある。関東では丸みのある瓦5~7枚を巻くように取り付け、佐賀平野では半円瓦を1枚で棟を巻く、

とのこと。香川県内の草葺き民家の屋根は小麦藁で葺くのが一般的だった。小豆島の「肥土山の舞台」で使っていた雁振瓦は、小麦藁葺き民家のものを再使用したもので、横幅約80cm、働き幅約40cmの鰐付き半円瓦である。山茅(ススキ)は小麦藁に比べて硬くて撓りにくいため、材料が短くなる棟を納めるには瓦の横幅がやや短くて施工には苦勞した。

香川県内には山茅を使用した民家も残っているらしい。茅葺き用の雁振瓦が存在するのか確認したいと思っている。

※雁振瓦とは、棟の最上部に葺く瓦の呼び名で、冠瓦(かんむりがわら)、衾瓦または伏間瓦(ふすまがわら)ともいう。



- ① 肥土山の舞台・雁振瓦据付
- ② 肥土山の舞台
- ③ 小比賀家住宅
- ④ 旧恵利家住宅
- ⑤ 小豆島の農村歌舞伎舞台
(四国民家博物館内)



KAGAWA HISTORICAL ARCHITECTURE COMMITTEE

特定非営利活動法人

香川歴史的建造物保存活用会議

ご相談・お問い合わせは

〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27

TEL : 0877-85-5126

FAX : 0877-85-5127

mail : info@kagawa-historical-archi.org

URL : https://kagawa-historical-archi.org



香川歴史的建造物保存活用会議ホームページQRコード